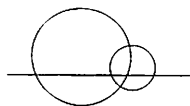


[国内シンポジウム]



戦前海外にあった愛大ルーツ校5校の 出身学生が語るアジアと愛大

—その体験と今日の高等教育への提言—

2010年10月31日 13:30～17:30

愛大豊橋校舎記念会館3階小講堂


《司 会》	愛知大学東亜同文書院大学記念センター長	藤田佳久
《挨 拶》	愛知大学学長	佐藤元彦
《発表1》 p. 12	旧満州・ハルピン在、ハルピン学院出身、愛大25年卒	谷 藤助
《発表2》 p. 16	中国・上海在、東亜同文書院出身、愛大23年卒	小崎昌業
《発表3》 p. 19	朝鮮・京城在、京城経専出身、愛大27年卒	奥田廣實
《発表4》 p. 22	旧満州・長春在、満州建国大学出身、愛大25年卒	佐藤達也
《発表5》 p. 27	台湾・台北在、台北高校・第四高校出身、 創成期の愛大教授（行政法）・台北帝国大学教授敏氏の子息	園部逸夫
《発表6》 p. 31	コメンテーター 弁護士、愛大42年卒	高井和伸

【司会】 それでは時間となりましたので、ただいまから愛知大学東亜同文書院大学記念センターの、今年度は国内シンポジウムを開催させていただきます。今日は足元が悪いく、しかも昨日は警報が出たものですから、大学祭の第1日目ですけれども学生諸君がほとんど準備できなくて、今日あたふたとやりながら、いろいろ他の仕事をやりまして。学生諸君にももっと来ていただきたいと思ったんですけど、どうも大学祭のほうに忙しそうだということでもあります。しかしながら多くの方にお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。

あらためてまた繰り返すことになってしまいますけれども、本学の東亜同文書院大学記念セン

ターはオープン・リサーチ・センターとして文科省の高度化推進事業に選択されました。そして5か年間のプロジェクトを進めてまいりまして、今年で最終年度を迎えます。毎年国内と国際の交互にシンポジウムを実施しておりまして、昨年は「欧米研究者から見た東亜同文書院」で、フランスの方やアメリカの方をお招きしてシンポジウムをやりましたけれども、今年は国内ということで、今回こういうテーマで実施することになりました。

今回の趣旨は「愛大ルーツ校5校の出身学生が語るアジアと愛大」となっていますけれども、もちろん東亜同文書院大学を中心に愛知大学が設立されたわけですけど、併せて大陸、アジア、台湾等、外地にあった高等専門学校とか諸外国の方々が、



戦争が激しくなりますと学業半ばで戦場に駆り出されたりして、志半ばにして国に帰ってこられた。そういう方々を愛知大学が受け入れまして、全部で80有余の高等専門学校とか大学の方々が愛知大学に集まりました。そういう方々が愛知大学の初期の創設期の大学を作られた。そういう経緯があります。

そこで今回は、東亜同文書院の卒業生の方も含めながら、それ以外の方々の、全員というわけにはいきません、学校数が非常に限られておりますけれども、それを中心に当時の様子、外国での、大陸での教育の仕組みとか、愛知大学での新しい大学生活とか、それと併せて、アジアを見る目と申しますか、その辺のところを明らかにしたいというふうに思っております。なお今回の企画は、このような今私が申しましたような志をもって、愛知大学の42年の卒業生で高井さん、ちょっとお立ちになってください。東京の支部長さんです。37階の愛知大学東京事務所の隣で弁護士を開業しておられ、日夜東奔西走、上から下から走り回っておられ、ずいぶん活躍していただいておりますけど、そういう愛知大学のルーツ校の資料を積極的に集めていただきました。今回は高井さんのこれまでの志をうまく生かす形でわれわれのほうもそれに乗っからせていただきまして、今回このシンポジウムをやらせていただくことになりました。

遅れましたけれども、私この記念センターのセンター長をやってる藤田と申します。今日は出席の方々にも大変お世話になりますし、特に遠路はるばる皆さん方にお越しいただいたものですから天候も気にいたしました。幸い台風も過ぎて良い日になったと思っております。ちょっと私、長くなりましたけれども、会の開催に当たりまして引き続き本学の佐藤学長からお話をいただきます。よろしくお願いします。

【佐藤】 皆さんこんにちは。本日のシンポジウム開催に当たりまして、ご出席をいただきましたこ

とをまず大学を代表してお礼申し上げます。併せて今回のシンポジウムはすでに藤田先生からご案内がありましたけれども、愛大のルーツ校5校の方々、5校に在籍し、その後愛知大学に入学され、卒業された方々に、愛大のルーツについて語っていただくと共に、チラシにもございますけれども、むしろこのタイミングにおいて愛大の将来についても大いにご示唆をいただきたいというふうに思っているところでございます。先ほどもお話がありましたけれども、愛大の前身ということでよく語られますのは東亜同文書院、あるいは後の東亜同文書院大学でございますが、これはご案内の通り学籍簿、あるいは成績簿というものを愛知大学から受け継いだということが1つの根拠になっております。しかしよく知られていますように、それ以外の大陸・アジアのほうから引き揚げてこられて愛知大学に入学をされた方々もたくさんおられまして、そういった意味では愛大のルーツを語るという際には、今日これからご登壇いただくパネリスト（小崎さん以外）の方々のお話も充分に踏まえなくてはいけないのかなと思っております。ところでございます。

チラシのほうにも書かれてありますけれども、そして私が先ほど申し上げました通りでありますけれども、ルーツを語っていただくと同時に、それは正にこれからの愛大の将来の指針として参考にさせていただきたいというふうに思っているところでございます。その点で言いますと、最近ご案内の通り日中韓大学間交流・連携推進会議というのが4月に発足しております。愛知大学にも創立レセプションには声がかかりまして、私も出席をしたところでございますけれども、愛大のルーツを考えてみた時に、今正に動こうとしていること、それを愛大は先取りしてしたのではないかな。逆に言うと、これからの愛大の1つの大きな姿というのは、そういったものにやはり軸足を置いて考えていくべきではないか。そんな感じで受け止めているところでございます。

中国との関係、あるいは中国についての研究という点では、あらためて申し上げるまでもなく、大きな成果を残してきたところでございます。それに加えて本学には、韓国について研究される、あるいは朝鮮半島について研究されるという方もいらっしゃるし、またハングルについてそれを教授できる方がいらっしゃる。さらには韓国出身の留学生も多いということを踏まえた時に、韓国に焦点を当てた研究・教育交流というのを、いっそう重点的に進めていく必要があるのかなというふうな感じもしております。その点でいきますと、今年に入りましてから本学の同窓会にお願いいたしまして、韓国に支部を作ってくださいということを申し上げました。非常にスピード感をもって対応いただけまして、つい先だって、約2週間前に同窓会のソウル支部が発足しております。校友課に先日問い合わせをしましたところ、今後さらに台湾支部の準備も始めているということですので、同窓会を通じて先輩と後輩のつながりを強くしていただく。そのような組織化を通じて大学全体をバックアップしていく。そして愛知大学としては、このチラシには東アジア大学というふうに書かれておりますけれども、日中韓という交流連携を中心にした大学としての展開、これを考えていきたいというふうに思っているところでございます。

併せて、東アジアと言いますと本学の実績でいきますとインドネシアであるとか、それからタイの大学とも協定を結んでさまざまに交流を展開しているところでございますが、ベトナムがまだ交流先としてはございませんで、ベトナムについても近々大学間の交流ができるような態勢、これを準備していきたいというふうな気持ちでおります。まあ東アジアと言いますと、東北アジアのみならず東南アジアも含めてということになろうかと思っておりますので、日中韓は中心になりますけれども、併せて東南アジア、よく考えてみますと同文書院の書院生は、現在の東南アジアの調査に相当程度

歩き回っておられたと認識しているところでございますので、そういった点を視野に入れながら、東アジア大学としての愛知大学を強化していく、そんなことを実は考えていきたいと思ってるところでございます。その点で再三繰り返しておりますけれども、本日のパネリストの皆さん、それからコメンテーターとしての高井先生のお話を充分に勉強させていただいて、そして今申し上げましたような今後の方向性ということをさらに固めていきたいというふうに思っているところでございます。

以上をもちましてこのシンポジウムの、私なりに理解をしている趣旨というものを少し申し上げさせていただきます。今日はご参加いただきまして誠にありがとうございました。

【司会】 どうもありがとうございました。それではいよいよ本題のほうに入らせていただきます。その前に簡単に発表形式等を少しご説明いたします。今日は5人のゲストの方にスピーチをしていただきますけれども、それぞれの持ち時間・発表時間は20分。大変短くて恐縮です。プラスその発表に関する5分の時間、合計1人あたり25分という持ち時間になります。5人の方の発表が終わりましたら休憩を10分ないし15分ぐらいとりたいと思います。そして後半の部は、先ほどご紹介いたしました高井先生のほうから、コメンテーターとして少しコメントをいただきたいというところであります。そしてそれが終わりましたら、全体の質疑を約1時間ぐらいとって行ないたい。ぜひフロアの方々からいろんなご意見・ご質問をいただければと思います。全体の終了時間は5時15分ぐらいを予定しております。そしてそのあと、こちらの梢風館というところの1階にございますレストランリュミエールで、5時半から約1時間ほど、今日の講師の先生方も含めて懇親会を実施したいと思っております。そこで色々とお聞きしたい方はぜひご参加ください。なお費用は無料ですので、ぜひご自由にご参加いただければ大変あり

がたいと思っております。このような予定で進めますのでひとつどうぞご協力をお願いいたします。

では早速1番目の方からお願いいたします。谷藤助先生であります。ではご登壇いただけますか。先生はハルピン学院のご出身であり、そして愛知大学昭和25年のご卒業であります。その年司法試験に合格されまして検事に任官され、公安調査庁総務部長にご就任になりまして、そのあと最高検察庁検事、山形地検検事正等を歴任されておられます。ということで、ひとつよろしく願いいたします。

【谷】 ご紹介にあずかりました谷です。私は愛知大学予科の第1期生でした。愛知大学が創設された年に予科3年生の編入試験を受けて合格して、その後法経学部しかごいませんでしたが1年生になりまして、そこを昭和25年に卒業し、予科は1期生、学部は3期生というちょっと変な形なんですけど、そういう形で卒業いたしました。愛知大学に入る前には、当時満州国と言っておったんですけれども、中国の東北地方、いわゆる東北三省のハルピン市にあったハルピン学院という、最後は満州国立大学ハルピン学院という正式名称なんですけれども、通称ハルピン学院というようにわれわれは呼んでおります、そこを卒業して愛知大学に入った。まあ簡単にはそういう経歴でございます。

ハルピン学院からは愛知大学ができた当時に、私を含めて5名の者が編入試験を受けて入っておりまして、言わば先ほどからご説明のありました愛知大学のルーツ校のささやかな1つの学校ではないかと思いますが、そのハルピン学院という学校について簡単にお話を、なぜハルピン学院へ入ったかというような話を、時間内にできればさせていただきたいと思います。配布されております講演資料の一番初めに「ハルピン学院について」という講演メモがございますが、よろしければそれをご覧いただきたいと思います。

ハルピン学院という学校はそこにも書いてござ

いますように、1920（大正9）年の創立でして、昭和20年の8月に、終戦と共に廃校になる。学院の期間は25年。わずか四半世紀に過ぎない寿命でございました。そこが時代のいろいろな移り変わりに従いまして、最初はここにございますように日露協会学校という名前で、その後満州国ができてからハルピン学院という名前になり、そして終わりの頃には満州国に学校が移管されて、満州国立大学ハルピン学院と、こういうような形で推移したわけです。最初の入学生、つまり大正時代の入学生というのは、学生の定員が1学年50名ぐらいで、ほとんど全部が府県費生、つまり日本の各県が募集して、学費を出して、その県で1名ないし2名が選抜されて行くという形式でございましたから、全部が言わば学費は県持ちで、一銭も要らずに行けた。日本の大学と違って学費が要らないというので、相当むずかしい競争率だったようでございます。

このハルピン学院というのは、卒業したら主に今のロシア、つまりソ連邦とのあいだの貿易とか通商とか、そういう仕事に従事する学生を養成する学校でして、日本で言う外国語大学のロシア語科と同じような学校でしたので、当時の日本とソ連とのいわゆる交易というのは、ソビエトの革命によってほとんど途絶されたというような状態になっていたので就職口がなく、相当な秀才の連中がわざわざ志をもってハルピンへ行行ったわけなんですけれども、卒業しても勤めるところがないというような状態で非常に苦勞をいたし、学校当局としても困って、50名の定員が30名に減らされ、それが当分続いたという細々とした、言わば塾的なような学校でした。それが昭和6年に満州事変が起こり7年に満州国が成立して、いわゆる満州国内での学生の需要もできたために、ハルピン学院という名前に変わって、そして最後には満州国の国立大学になったために、やや就職口が持ち直して30名が60名になり、私達が入った昭和18年には100名募集されるというような形で、活